

令和5年度（第46回）

校内放送指導者講座 報告

令和5年12月27日（水）、28日（木）の2日間、東京都千代田区紀尾井町の千代田放送会館において校内放送指導者講座が実施されました。主催は全国放送教育研究会連盟とNHKです。高等学校における校内放送活動の意義と役割を深めその指導についての諸問題を究明するとともに、具体的な指導の充実を図ることを目的とする全国の高等学校の放送部の顧問を対象にした研修会です。毎年12月下旬に開催されており、今回もオンラインでの配信も行うハイブリッド形式で実施しました。今年度は、オンラインでの参加者は、個人での参加に加え、各都道府県で1か所に集まってグループ討議をしながら講座を受けるグループ参加の形式も取り入れました。会場に70名の参加者、オンラインには、61名を迎えての実施となりました。



研修会のプログラムは以下の通りです。

講座1「校内放送指導実践発表『力を合わせてやっていますー長崎のやり方と私の考え方』」

講師：長崎県立長崎北陽台高校 広松 由美 福田 ゆり子

講座2「アナウンス・朗読 模擬審査」

講師：NHK財団ことばコミュニケーションセンター 専門委員 山田 敦子

講座3「番組制作の現場におけるAIの実情と今後の将来像」

講師：NHKメディア総局 メディアイノベーションセンター
センター長 田中 瑞人

講座4「番組 模擬審査」

講師：NHKメディア総局第1制作センター<教育・次世代>
チーフ・プロデューサー 白井 健大

会場での参加者は8人から9人のグループに分かれて、グループ討議などを交えながら進めました。各講座の内容は以下の通りです。

講座 1 「校内放送指導実践発表

『力を合わせてやっていますー長崎のやり方と私の考え方』

講師：長崎県立長崎北陽台高校 広松 由美 福田 ゆり子

第 70 回 NHK 杯全国高校放送コンテスト決勝大会で、アナウンス部門に 1 名、朗読部門に 2 名が進出した長崎県立長崎北陽台高等学校放送部顧問の広松由美先生と福田ゆり子先生を講師にお迎えしました。第 1 部では、広松由美先生から指導の方法について、第 2 部では、福田ゆり子先生から長崎県独自の取り組みについてお話していただきました。



第 1 部 私の考え方

1. 朗読について

(1) 朗読は聞き手と一緒に創るもの

朗読は、まず解釈する。人様の書いた文章なので、しっかり解釈することが大切。作品からのメッセージがある。アナウンスは、自分で感動を見つけて書くものなので、事実を伝えただけで伝えたいことが伝わる要素がある。朗読は、伝える値打ちを作らないといけない。解釈が必要。読む前に十分に考える。聞き手へのホスピタリティが欲しい。聞いている人がどう思うかを考える。最初に出した音に肉体的に縛られると思うので、考えた末に狙った音を出してみることを推奨している。聞いている人がどう思うか、聞き手にあわせて読む。朗読は、時間で流れて消えていくもので、目で読む読書と違って戻ることができない。大事な言葉はしっかり残していかないと、伝わりにくい。計算して言葉を置いていくことが大切。

(2) 伝わる朗読をするために

①話ことばのルールに従って読む

他人が書いた「書き言葉」を「話し言葉」に換える。意味のまとまりで読む。

②息遣いを意識する

作者の文体を研究して、一文一息が原則。どこで息継ぎをするか、考える。

③内容に沿った変化をつける

大切な言葉を「立て」そうでない言葉は「捨てる」。「間」と「テンポ」を工夫する。

(3) 朗読～私の考え方

①発音、発声について

朗読向きの声はない。地声を鍛えるのが大切。作り声だと、心情が表現できない。地声じゃないと、気持ちのがのっていかない。息もできるだけ長いことが望ましいので、基本の発声を大切にしてほしい。

②地の文について

(i) 情景描写をどう読むか

舞台装置を作っていく。「どこに」「どんな」「何」があるのか。大切な要素をしっかり置き、

それ以外は思い切って捨てる。

- (ii) 人物や物の「動き」をどう読むか
間とテンポが大切。

③セリフについて

セリフをどう読むかは、地の文に書いてある。セリフだけで頑張りすぎるのはNGというより損をする。作りこんでいかなきゃいけないセリフ（勝負する言葉）以外は、ある種の記号と考えて地の文に書いてあることと違和感がないように作る。それが満たされていればよい。

2. 最後に

- ・放送部員としての、高校生としての、成長を促す。
- ・生徒は、何をきっかけに理解するかわからない。先生方が、朗読を聞いて思ったことを話すことが導きになる。
- ・不特定多数の人が聞き手である。

第2部 長崎のやり方

1. 40年以上続いている共同指導体制

メリット

- ① 初めてでも不安がない。
- ② ネットワークがあるので相談できる。
- ③ 上位大会で経験のある生徒に他校の生徒も指導してもらえる（指導者として初心者の先生方も学べる）
- ④ 何らかの形で毎月交流があるので、孤独になることがない。いつでも気軽に相談できる。一人で悩まなくていいのが、非常に大きい。

2. 教員不足と働き方改革の中で

毎月会うというこの体制が必要だと思う。辛いことを相談できる。できないことを指導してもらえる。共同でできることは大きい。学校の壁もなく、先輩後輩もなく、指導しあえる、それが、長崎の強みであると思う。

講座2 「アナウンス・朗読 模擬審査」

講師：NHK財団ことばコミュニケーションセンター 専門委員 山田 敦子

初めに審査基準を確認し、今年度のNHK杯全国高校放送コンテスト全国大会準決勝に進出した生徒の録音を、アナウンス・朗読ともに4人ずつ聞き、実際のコンテストと同様の方法で模擬審査をしました。講評用紙の記入についても体験していただきました。グループ討議を経て、講座に参加した先生方の平均点、最高点最低点、山田先生の評価点、実際のコンテストの平均点を公表し、それをもとに山田先生がお話しく



さいました。

〈アナウンスのポイント・指導について〉

- ・「読む」ではなく「話しかける」
- ・取材をしよう。聞きたい内容を中途半端にしない。
- ・発音は大切だが、内容を「伝える」ことに力を注ごう。
- ・無理にはきはき読もうとすると、逆に滑舌が悪くなる。
- ・面白いと思ったことを実感をもって「話しかける」ことがアナウンスの原点 など。

〈朗読のポイント・指導について〉

- ・タイトルはしっかり読む。
- ・地の文と会話の読み分けを意識する。
- ・朗読の内容と読みのトーンが合っているか考える。
- ・自分の息のリズムで読むと、原文のリズムや原作の表現を逃してしまう。原作の句読点をなるべく尊重する。
- ・普段の声を大切にする。自分の声を好きになろう。
- ・喉に力が入ってしまうと、喉から押し出すような声になる。口の中をつぶさない。
- ・様々な人の様々な表現があって良い。
- ・不必要に情感を込めすぎない。
- ・朗読の「会話」は「芝居の台詞」ではない。地の文のヒントを活かし、ニュアンスで表現しよう。
- ・大事な単語は何か考えよう。
- ・抽出個所に「挿入部分」があると難しい→間を取る、はやさや高さを変える など。

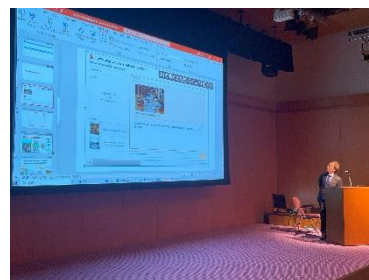
模擬審査や、実際のコンテストではできない審査についての討議、情報交換などが活発に行われ、ときには結果にどよめくこともありました。先生のお話をうかがって「普段の声を大切にする」こと、「面白いと思ったことを話しかける」ことが大切だとあらためて実感しました。具体例を交えながら、大変わかりやすくお話しくささいました。講座にご参加の先生方は今後の活動につながる成果をたくさんお持ち帰りいただけたことと思います。

山田先生、ありがとうございました。

講座3 「番組制作の現場における AI の実情と今後の将来像」

講師：NHK メディア総局 メディアイノベーションセンター センター長 田中 瑞人

生成AIの出現により、多様な未来が模索され始めています。知らず知らずに私たちの生活のあらゆるところでAIが活用され、様々な業種で人の活動からの移行がなされています。そんな中、番組制作を初めとする放送の現場ではどのように扱われているのか、また未来に向けてどのような動きになっているのかを田中氏から伺いました。



はじめにAIの基本的な知識の整理からお話いただきました。AIの活用状況を生成AIが生まれる前後で比較し、ディープラーニング技術の進化と大規模言語モデルの構築による生成AIの今後の可能性について、大変興味深く、また高揚感を覚える内容を披露いただきました。

それと同時に生成AIを取り巻く様々な課題にも言及されました。これは今後のコンテストにも関わる課題です。現在でもアナウンス原稿や番組台本を作ろうと思えばほんの数ワードを入力するだけで、生成AIが一定の形で作り上げてしまいます。またフェイク動画などの氾濫が危惧されます。そこには人権侵害や著作権侵害などクリアしなければならない課題やどのようにそれが生成されたのかその元となるデータや作成過程の透明性が求められます。この辺りの整備状況が道半ばであることと、この技術に人間がどう関わっていくのか、ここ数年の取り組みが人間とAIとの未来を決定づけてしまう大事なタイミングであるという問題提起でまとめられました。

放送の現場も教育の現場も今現在抱えている課題は同じということを共有した90分でした。

講座4 「番組 模擬審査」

講師：NHK メディア総局第1制作センター〈教育・次世代〉
チーフ・プロデューサー 白井 健大

講座4「番組制作指導」は NHK メディア総局 第1制作センター〈教育・次世代〉チーフ・プロデューサー 白井健大さんに講師をお願いしました。具体的な時間の割り振りは以下の通りです。

(午前 60分)

自己紹介～番組制作で最も大切にしていることは？(約30分)

創作ラジオドラマ模擬審査(約30分)

(午後 150分)

創作ラジオドラマ意見交換(約15分)

講師による講評(約15分)

テレビドキュメント模擬審査(約30分)

テレビドキュメント意見交換(約15分)

講師による講評(約15分)

よく寄せられる質問について(約50分)

質疑応答(約10分)



模擬審査

第70回 NHK 杯全国高校放送コンテスト全国大会で「準決勝」に出品された作品のなかから、創作ラジオドラマの3作品、テレビドキュメントの3作品を選抜し、それを会場で再生・上映して模擬審査を行いました。模擬審査を行った後は、参加者同士で互いに自分のつけた点数や採点の仕方、番組に対する感想などを話し合いました。顧問経験が浅い方からベテランの方まで非常に活発に話し合う様子が見受けられました。模擬審査に先立って『番組制作で最も大切にしていること』のお話があったためか、例年よりも採点し易かったようです。実際のコンテスト点の順位と異なる点数をつけた方も、自分の採点に自信を持てたようでした。

講師による講評・解説

まず、この指導者講座で例年よく寄せられる代表的な質問(「高校生らしさとは?」「作品を客観的に審査する基準とは?」「おもしろいテーマ・ネタの見つけ方」など)の回答から始まりました。会場内の何人かに話を振るなどして、画一的な結論でなく様々な考え方があることが学べました。さらに、実際に白井さんが行っている番組構成の方法の紹介など、ここでしか聞けないようなお話を聞くことができました。また、「番組制作に必要な機材」「オススメ編集ソフト」など、番組制作の経験が浅い参加者にも参考にしやすい話題も多く取り上げていただきました。